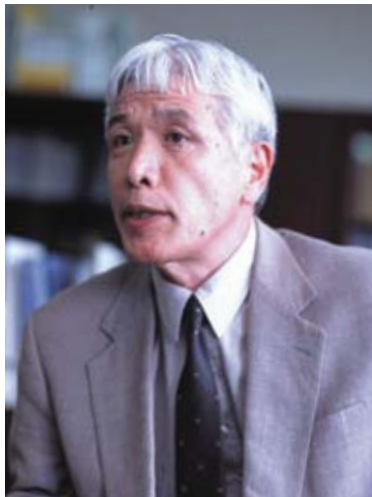


世界と地域に 開かれた 大学であるために

国立大学法人化のうねりのなか、
社会における個々の大学の役割が改めて問い直されている。
金沢大学は大学憲章に「社会貢献」を明記し、
世界と地域に開かれた大学としてのグレードアップを図っている。
その先頭に立つ林勇二郎学長が、大学の社会貢献について語った。



金沢大学
林 勇二郎 学長

”象牙の塔 からの脱却”

— 〇〇四年四月一日に制定された大学
憲章では、金沢大学は「地域と世界
に開かれた教育重視の研究大学」の位置づ
けをもって改革に取り組むとし、項目とし
て「教育」「研究」のほか、「社会貢献」が

盛り込まれ、社会貢献に対する大学の明確
な姿勢を示した。
金沢大学は文部科学省から地域貢献特別
支援事業の第一次選定大学の指定を受けて
おり、社会貢献コーディネーターの設置を打
ち出した。社会に開かれた大学の”走り”で
もある。

大学の社会貢献の在り方については、学
内でも議論があるところだが、大学によっ
て温度差がある。しかし、大学の二本柱で
ある教育と研究は欠かせない。有為な人材

を輩出し、研究によって創造された知を社
会に還元していく。このことはいまも昔も
変わらない大学の社会貢献の基本である。
大事なのは、変わりゆく社会の期待に応え
ているか、時代の要請に沿っているかとい
うことだ。

教育も研究も成果が出るまでには時間が
かかり、評価も難しい。しかし、それを理
由に大学が独尊を我が物としているとすれ
ば、これは忌々しき問題だ。大学法人化の
キーワードは自律自律、個性化、競争で、
そのためには社会貢献が大きくクローズア



ツプされている。国公私のイコール・フィッティング（同じ土俵）の中で、大学と社会をつなぐ社会貢献の活動を際立たせ、それによって本来の教育や研究を活性化させたいという自論があるからだ。

教育の面では、間口を広げて学生の受け入れの多様化を図り、人材育成サイクルの構築を主眼に置いている。編入学や学部卒の大学院受け入れなど教育機関同士の接続、留学生の受け入れ、社会人のリカレント（回帰、循環）教育、生涯学習などがある。学部や大学院でのフルコースだけではなく、カフエテリアのような立ち寄りスタイルもとれるようになっていく。

研究の面では、真理の探究に関わる基礎研究が中心だったが、ビジネスや技術に直結する目的型研究も盛んになってきている。基礎研究によって得られた知財が実用に使われるまでには四十年から五十年の期間を要してきたが、今や基礎研究と実用研究との距離は近づいている。実践的な研究を進めることで新たな基礎研究が発展することもある。

さらに、両者が同時に進行する時代においては、環境や生命の問題に見られるエシ

ックス（倫理）が重要な課題となる。そして、これらのことに人類が責任を持つためにも大学で基礎研究と実践研究の両方を行うことは非常に意義がある。

産学連携の動きが加速しているが、産学は企業と大学が利益を共有するためではなく、グローバルな環境や人類の利益のためには何か必要かを考えていかなければならない。企業にとって大学の見えにくい部分を補完するために、TLO（技術移転機構）や学内でのインキュベーション施設を設置し、さらにそれらのギャップを埋めるためのファンド（基金）を整え、橋渡しの事業も進めている。

また、自分の専門分野のことを、学術用語ではない平易な言葉で社会に伝達することも大切である。サテライトプラザでのセミナーや市民講座では、教員たちは自分たちの研究を市民にわかりやすい形で届ける工夫を行っており、そのことが同時に研究へのフィードバックにもなっている。

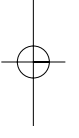
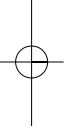
大学の社会貢献とは、大学が持っているリソースをいかに社会に平たく判り易く提供していくかということである。

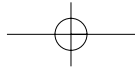
東アジアの 知の拠点

地

球化の流れにあるグローバルイズムに対し、EU域内の市場統合をはじめ世界的にリージョナリズム（地域主義）の動きが進んでいる。東アジアでも、アセアン（ASEAN＝東南アジア諸国連合）は「プラス3」の中国、日本、韓国と二〇〇五年クアラルンプールで東アジア首脳会議を開催することに同意した。お客様であった中国、日本、韓国が、今年からはアセアン諸国と同等の立場をとることとなるなど、東アジアでのリージョニングも目に見えて動き出している。

金沢大学は、これまで地域社会及び国際社会の中で活動し、貢献してきた。地域のための大学は、地方大学である金沢大学のレゾンデートル（存在理由・存在価値）の一つでもある。そしてこのような地域貢





献として、教育学部や医学部は教員や医師を養成し、地域に必要な人材を供給してきた。「天下の書府」と呼ばれた加賀藩の時代から、高等専門学校や新制大学が中心となり近代学術都市へと発展してきた今日まで、本学は伝統文化を育て歴史をつないできたと言える。

国際的には、世界の国々は戦略的に知識基盤社会の形成を進めている。グローバル化の流れに国や地方が埋没しないためにも、人材育成と知の創造を担う拠点大学の存在が重要となってくるからである。

東アジアは産業の成長がさまざま、世界で最も人口が密集している地域である。中国でのGDPは一年間で九パーセント伸びたが、それだけ多量のエネルギーを消費したこともなる。産業の発展に関わる環境汚染に限らず、テロやSARS、朝鮮半

島の冷戦構造など、すべてにおける「安全保障」が必要となってきたり、それを見据えて東アジア共同体が動いている。

金沢大学は、北陸や日本海側にとどまらず、アジア圏を視野に入れた地域のなかでの知の拠点として、世界に向けて情報を発信するためのレゾナントルを考えなければならぬ。

学生発の社会貢献

大 学の本来の在り方がすなわち社会貢献であり、今後は教育と研究の二本柱をどのように強化し、それを活かして社会の要請にいかに対応していくかが問われることとなる。大学職員と学生編集委員が制作していく広報誌は、大学の役割を住民に伝えることで大学と社会をつなぐツールの役割を果たす。

大学生生活における人間形成の場には次の三つがあると考ええる。学業空間、生活空間、そして社会空間である。このような場を通して、職業人そして市民としての社会人に

なるための準備を行うことになる。

学業空間は学生が大学で教養や専門に関する講義を教師から受け、自分で学習し、必要な単位を採ることで専門職業人となるための資格を獲得する場である。さらに住民として、ゴミ出しや交通のルールを守ったり、アルバイトで社会体験をするということもある。

本学の教育学部の学生は、一年生の段階で小学校などに出向き、現場での体験をする。医療や看護、臨床心理の学生も同様だ。自分の専門を通じ、将来職業人になるためのものを持つて社会との関わりをなかで体験してこくことは、社会貢献につながり、自分へも還元されている。

授業に限らず、サークル活動の中でも同様のことが行われている。

論語に「学びて時にこれを習う、亦に説ばしからずや」とある。大学ではいろいろなことを勉強するが、それを外で身をもって体験することが大切であり、それは実となつて自分に還ってくる。

学生の広報誌づくりの活動そのものも、制作を通して社会貢献について考えることも、学生生活を送るうえで非常に意義深いことであり、大学の社会貢献にとっても大きな意味を持ちうる^①と考えている。

